

ハプスブルク帝国の覇権？ — 1510年代末～1520年代の西ヨーロッパ国際関係 —

山 田 慎 人

はじめに

1494年のフランス国王シャルル8世のイタリア半島侵攻を一つの大きな契機として、15世紀末から16世紀初頭にかけての時期に、西ヨーロッパにある程度洗練された国際関係の体系が定着したことは、すでに見た。たしかに、中世の西ヨーロッパでも、諸国家間の力のバランスの計算や大規模な同盟関係は存在したのであり、1494年をヨーロッパにおける国際関係の始まりとする見方はあまりに単純にすぎる。しかし、シャルル8世のイタリア遠征の当初の成功が他の諸国に与えた脅威は、15世紀のイタリア半島で発展した近代的外交制度の西ヨーロッパ全域への拡大、そして、大砲の砲撃に耐えうる稜堡式要塞の西ヨーロッパ各地への普及を促進することによって、この地域における国際関係の発展に大きな役割を果たした。前者は西ヨーロッパ諸国間の外交交渉や同盟形成を容易にし、後者は一国による西ヨーロッパ全域の征服を困難にすることによって、この地域に姿を現しつつあった国際関係、すなわち複数の独立した国々の間に密接な関係が維持される状態が、継続的に発展することを可能にしたのである¹。

さて、この西ヨーロッパに定着しつつあった国際関係は、1494年以降約20年の間、シャルル8世、ルイ12世、フランソワ1世という、当時の西ヨーロッパの最強国フランスの歴代国王が、自らが継承権を持つと主張したナポリ王位やミラノ公位の確保やその近隣での領土拡大を狙って繰り返しイタリア半島に侵攻し、フランスの成功に対して他の諸国が力を合わせて対抗するという基本的

構図をとった。しかし、この状況は、1520年頃を境に、いわゆるハプスブルク帝国の出現によって大きく変わる。つまり、ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世と1482年に死去したブルゴーニュ女公マリーの子ブルゴーニュ公フィリップを父、アラゴン王フェルナンド2世とカスティーリャ女王イサベル1世の子ファナを母として、1500年に誕生したハプスブルク家のカールは、その後19年の間に父フィリップ、祖母イサベル、祖父のフェルナンドとマクシミリアンが相次いで死去し、また父フィリップの死後狂気に陥った母ファナの兄と姉、その子供達も早くに死去したことで、ハプスブルク家のドイツの世襲領とブルゴーニュ公であった父が支配したネーデルラントやフランシュ＝コンテ、アルトワのみならず、母方の祖父が支配したアラゴン王国を中心とするスペイン東部やナポリを中心とするイタリア半島南部、シチリア島、サルデーニャ島、祖母が支配したカスティーリャやその南米植民地を含む広大な領土の支配者となり、さらには神聖ローマ皇帝の地位も獲得した。その後17世紀半ばまでの130年程の西ヨーロッパ国際関係は、ハプスブルク家を軸に動いていくことになる。

この16世紀前半から17世紀半ばにかけての、ハプスブルク家が優越を維持したとされる時期の西ヨーロッパの国際関係は、国際政治学あるいは国際関係論と呼ばれる学問領域において、どのように扱われてきたのであろうか。国際関係論におけるこの時期の扱いの第一の特徴は、無知と無関心である。現在の国際関係論においては、ヨーロッパにおける最後の宗教戦争であった1618～48年の三十年戦争の和平条約であるヴェストファーレン（ウェストファリア）条約の締結をもって近代的な主権国家体系が確立されたという考え方が定説となっており、それ以前の時期の国際関係には、大きな関心が払われてこなかった。つまり、1648年以前の130年足らずの西ヨーロッパ国際関係の基調となっただけは、西ヨーロッパの再カトリック化と皇帝権の復活という中世的な目的を達成しようとするハプスブルク家の試みであって、現代の国際関係と共通性の薄いこの時代の分析から学ぶべきことは少ないと考えられている。

このような態度は多くの研究者に共通するが、代表的な例をあげれば、1960年代末から約30年にわたって版を重ねた K. J. ホルスティの大部の国際政治学のテキストでは、歴史的な国際システムの代表例として、古代中国、古代ギリシア、そして、1648年から1814年にかけてのヨーロッパの国際関係をあげて分

析するが、後者についてはそれ以前の時期との断絶と現代との共通性を強調し、古代から1648年までの間についてほとんど全く触れない。この背景には、神聖ローマ帝国の権威の消滅を公式化したとされるウェストファリア条約を、近代ヨーロッパ国家系の出発点とみなす認識がある²。

また、ジョセフ・S. ナイ・ジュニアは、彼の非常に評価の高い国際関係論のテキストの中で、世界政治の基本形態として「世界帝国システム」、「封建システム」、「無政府的国家システム」の三つをあげるが、最後の「無政府的国家システム」の出現に関して、「1500年ころに、ヨーロッパにも、大規模な領土をベースにした諸王朝が登場し…それと同じころ、都市国家や諸地域のゆるやかな連合体などという他のタイプの国際的政治体は消滅に向かった」ことを指摘しながらも、主権国家体系の確立には1648年のウェストファリア条約を待たねばならなかったと主張する。ナイは1500年頃から1648年までのヨーロッパ国際関係を明らかに過渡期とみなしているが、この過渡期にどのような変化が見られたのかには全く注意を払わない³。

さらに、国際関係の理論家から歴史家へと目を転じるなら、ヘンリー・キッシンジャーは、大著『外交』において、ハプスブルク家によるヨーロッパの宗教的再統一と皇帝権の再確立の試みを、近代的主権国家体系の出現を防げようとする試みとして否定的に評価し、この試みに国家理性と勢力均衡の概念でもって対抗したりシュリューを「近代国家系の父」と呼び称賛し、リシュリュー以降の国際関係の記述に著書のすべてを充てた⁴。このように、国際政治学や国際関係論において、ハプスブルク家が優越を享受した時期は、せいぜい近代主権国家体系成立の前史としての扱いを受けるか、全く無視されることが多い。

もっとも、すべての国際関係の研究者が、ハプスブルク家を軸に展開された16世紀前半から17世紀半ばの西ヨーロッパ国際関係を等閑視するわけではない。国際関係の分析において1500～1650年頃の西ヨーロッパに一定の関心を払う少数派の研究には、明確な共通性がある。それは、近代ヨーロッパの国際関係史を覇権の循環の歴史と捉え、16世紀前半から17世紀半ばのハプスブルク帝国を、初期の覇権国あるいは覇権に限りなく近づいた国とみなすことである。

このような見方を打ち出した初期の代表的研究者として、アーノルド・トインビーを挙げることができる。トインビーは、近代西欧史には5つの大きな戦

争のサイクルが存在し、それぞれのサイクルは、全面戦争、小康期、補完戦争、全面平和という経過をたどったと主張した。そして、全面戦争の原因を、「すべての競争国よりも先に進んだ一つの強国が世界支配という恐るべき野望を抱き、その野望がこの国際関係の特定の組織に巻き込まれる他のすべての国の対抗的連合を呼び出す」ことに求めた。具体的には、西欧近代史最初のサイクルにおける全面戦争は、1494年のシャルル8世のイタリア侵攻とそれに続く1525年までの一連のイタリア戦争であり、補完戦争は主に1536年から1559年の間の三次にわたるイタリア戦争である。トインビーは、このサイクルの初期においてはフランスの力が優越していたが、ハプスブルク帝国の出現後はヴァロア朝フランスとハプスブルク家の二極対立へと移行したとみなす。トインビーの二つ目の戦争のサイクルは1568年に始まり1672年に終わる。この時期の全面戦争は、1568～1609年までのネーデルラント独立戦争であり、これはハプスブルク家の立場から見れば「世界支配の試み」であり、スペインからの独立を求めたネーデルラントの新教徒やそれを支援したイングランドから見れば、ハプスブルク家による覇権の確立を阻止するための戦いであった。トインビーは、1618～1648年の三十年戦争を、1568～1609年の全面戦争の余波としての補完戦争と捉える。つまり、三十年戦争を、先の全面戦争においてネーデルラントの反乱の鎮圧に失敗し、イングランドの征服にも失敗したハプスブルク勢力の「欲求不満」から発生した戦争とみなす。このように、トインビーは、その後ルイ14世のフランス、フランス革命政権とナポレオンのフランス、20世紀前半のドイツと続く、世界支配を目指して失敗した勢力の一つとして、近代史の大きな流れの中でハプスブルク帝国を位置づけるのである⁵。

トインビーの議論によく似た覇権循環論を経済の分野で唱えたのが、エマニュエル・ウォーラーステインらの世界システム論である。ウォーラーステインらは、1979年の論文において、資本主義世界経済の歴史において覇権国の勃興から勝利、成熟、衰退に至るサイクルが四つ存在したと主張し、1450年頃から1575年に至る第一のサイクルにおける覇権国としてハプスブルクを挙げた。ハプスブルクの覇権の衰退後、1575～1672年にかけてのオランダ、1798～1897年にかけてのイギリス、1897以降のアメリカという三つの覇権のサイクルが出現してきたとされる⁶。

しかし、何と云っても、近代ヨーロッパで最初に覇権を追求してそれにほば

成功した国という、われわれの多くが抱くハプスブルク帝国観の形成に最大の役割を果たしたのは、ポール・ケネディの『大国の興亡』であろう。ケネディは、近代におけるヨーロッパの発展と世界の他の地域の停滞を、後者では集権的な政治体制がとられて軍事的、商業的な競争が生まれなかったこと、これに対して前者では政治的分裂と対立が軍事的な革新や商業の競争的発展につながったことによって説明する。しかし、ケネディによれば、1500年頃にヨーロッパの近代が幕を開けてから最初の150年間には、ハプスブルク家によるヨーロッパ支配の可能性があった。ケネディは16世紀前半から17世紀半ばまでの西ヨーロッパ国際関係史を、ハプスブルク帝国による覇権の追求を他の諸勢力が手を組んで阻止した過程として描きだし、ハプスブルクの覇権追求が人口や財政、軍事における優位にもかかわらず失敗に終わった理由を、第一に、当時のいわゆる「軍事革命」によって引き起こされた戦費の増大が帝国の財政を圧迫し破綻に追い込んだこと、第二に、ハプスブルクの敵がハプスブルク勢力との戦いにおいて一時的な和平を結び、財政的な回復をはかることができたのに対して、西ヨーロッパとその周辺地域に広く散らばる領土と利害を持つハプスブルク家は、休むことなくいずれかの敵と戦うことを強いられ、その分疲弊が激しかったこと、第三に、帝国がその資源を効率的に動員するシステムを持たず、この問題は特に帝国の莫大な戦費を支える最大の柱であったスペインにおいて深刻であり、そこでは短期的な税収増大のためにその経済的基盤を弱めるような政策がとられたことを原因にあげる。ケネディは、このハプスブルクのヨーロッパ支配の試みが失敗に終わった17世紀半ば以降、ヨーロッパの国際関係はより多極的で柔軟な同盟と勢力均衡の体制へと移行したが、その後も大国間の激しい競争は続き、その興亡は地政学的な要因や、そして何よりも軍事的な努力を支える経済、財政力を持っているどうかによって決定されたと論じた⁷。

このように、現在の国際関係の研究においては、ヨーロッパ史に1648年という決定的断絶を認め、それ以前の時期に全く研究上の価値を認めない立場と、過去500年ほどの国際関係の歴史に周期的な循環を認めながら一つの大きな連続性を持って捉え、その初期のサイクルとしてハプスブルクの優越期を捉える見方がある。それでは、はたして、16世紀前半から17世紀半ばの時期を、現代のわれわれが教訓を得ることのできない国際関係史における前近代とみなすこ

と、あるいは、それを、現代そして近い将来にも繰り返されるであろう覇権をめぐる闘争の一つの重要な事例とみなし、そこから教訓を得ようとすることは正しいのであろうか。もっとも、この短い論稿において、16世紀前半から17世紀半ばまでのすべての時期を扱うことはできない。ここでは、ハプスブルク家のカールが西ヨーロッパの国際関係において優位を確立していった1510年代末から1530年頃までの時期に分析を絞る。

第1章 「ハプスブルク帝国」の形成

ハプスブルクの覇権について考える時に避けて通れない一つの重要な問題は、ハプスブルク家が本当に意図的に覇権を追求したのかである。ハプスブルク帝国の出現の過程は、少なくともその形成に関して言えば、それがかなりの程度偶然に左右されたことを示している。

たしかに、ハプスブルク帝国出現の原因となった、ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世の子ブルゴーニュ公フィリップとカトリック両王（アラゴン王フェルナンド2世とカスティーリャ女王イサベル1世）の娘フアナの1496年の結婚は、歴史的にそれぞれイタリアの北と南に強い影響力を保持してきたハプスブルク家とアラゴン家が、手を組んで1494年のシャルル8世のナポリ侵攻後の情勢に対処するという、明確な意図を持った政略結婚であった。シャルル8世によってナポリから追われたナポリ国王フェルディナンド2世は、アラゴン王フェルナンド2世と同じアラゴン家に属する親戚であった。アラゴン王は1497年初頭までにフランス軍をナポリから追い出すことに成功したが、ハプスブルク家との協力によって、アラゴン家のナポリ王位への権利を確かなものにしようと望んだ。これに対して、神聖ローマ皇帝マクシミリアンは、皇帝の封土であるミラノ公国の支配者としてルドヴィコ・スフォルツァを承認し、その娘ビアンカ・マリアと結婚していたが、シャルル8世に男子が生まれなかった場合フランス王位を継ぐであろうヴァロア家傍流のオルレアン公ルイが、自分の祖母がかつてミラノ公に嫁ぎ自分がその血をひくことを根拠に、ミラノ公位への野心を示しており、アラゴン王との協力によってこれに対抗しようと考えた。

しかしながら、この結婚が、近い将来、ハプスブルク家の所領とスペインの合同につながると予測した者はいなかった。ファナにはブルゴーニュ公フィリップの妹マルグリットと結婚した兄ファン、ポルトガル国王マヌエル1世と結婚した姉のイサベルがおり、ファナやその子孫がカトリック両王の支配地を継承するとは意図されていなかったのである。しかし、1497年にファンが死去し、同年妻が男子を死産して、1498年にはイサベル、1500年にはその息子ミゲルが死去するに至って、ファナがカトリック両王の所領の後継者になった。これは、1500年に生まれたファナの子カールが順調に成長した場合、彼の下でカトリック両王の支配地とハプスブルク家の世襲領が統合される可能性が高いことを意味した。これは、J. H. エリオットが述べたように、フィリップとファナの結婚の「完全に予期しない」結末であった。当時随一の外政家として名を馳せたフェルナンドの、最大のライバルであるフランスに対抗するための同盟政策は、皮肉なことに、スペインの外国の王朝による支配へと道を開く結果となったのである。

もっとも、フェルナンドはそう簡単にハプスブルク家によるスペイン支配を受け入れたわけではない。フェルナンドは、妻のカスティーリャ女王イサベル1世が1504年に死去すると、その後継者である娘のファナ及びその夫フィリップとの間で、スペインの将来をめぐる激しい駆け引きを繰り広げた。フェルナンドは彼の伝統的な反仏政策を改め、1505年末にフランス国王ルイ12世と条約を締結し、ルイの姪ジェルメーン・ド・フォワと再婚した。後継者を作り、フランスの支持を得て、出来ればカスティーリャ王位及びアラゴン王位、少なくとも後者を継がせることが、その一つの目的であった。当時の支配者が、国民国家の統合よりも、自らの家系の利益を重視した分かりやすい例である。ジェルメーンは1509年に男子を出産するがこの子供は数時間で死去し、その後もフェルナンドは後継者を得ることができなかった。この間、1506年にフィリップが死去したが、それを原因としてファナが発狂したため、幼少のカールに代わってフェルナンドはカスティーリャの統治を行った。1516年のフェルナンドの死をもって、すでにブルゴーニュ公としてネーデルラントの支配者となっていたカールが、カスティーリャ、アラゴン及び両王の南米や南イタリアの所領の支配者となる。フェルナンドが、自分の名を受け継ぎスペインで育ったカールの弟フェルディナントにアラゴン王位を与えることを記した遺言状の撤回に

同意したのは、その死の床においてであった⁸。

さらに、興味深いことに、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世も、カールがスペインを支配しながらオーストリアのハプスブルク家の世襲領も支配するのではなく、弟のフェルディナントがハプスブルク家の世襲領と神聖ローマ皇帝位を受け継ぐことを望んだ。マクシミリアンが望んだのは、家門の繁栄であって、ヨーロッパの支配ではない。マクシミリアンが二人の孫に彼の望みを押しつけなかったのは、二人が不満を持つ解決を彼らに押し付けられればいずれ兄弟間の戦争となると恐れ、二人が納得できる解決を本人同士が交渉するしかないと考えたからである。

結局のところ、マクシミリアンが1519年に死去した際に、カールは、フェルディナントに領土上の譲歩を約束しながら、オーストリア大公の地位とハプスブルク家の世襲領を受け継ぎ、神聖ローマ皇帝を選出する選挙に自ら立候補して、皇帝に選ばれた。カールが後にフェルディナントに譲ったのは、ハプスブルク家の世襲地の実質的な統治権のみであった⁹。この帝国成立の最後の過程では、たしかに、カールがすべての領土を受け継ぐ意思を示し、兄弟間の争いに勝利した。しかし、これは、単なる親族間の遺産相続争いの性格が強く、このような争いをヨーロッパの覇権や支配をめぐる争いと呼ぶことには大きな無理がある。ハプスブルク帝国は、明確な意図と計画の結果でもなければ、軍事的征服によって実現したのでもない。帝国出現の原因となった婚姻の当事者自身が、一人の孫による彼らの遺産すべての継承を望まなかったのである。ハプスブルク帝国は、たとえそれを覇権国と呼ぶことが正しいとしても、当時の国際関係の特徴づけるヨーロッパ各地を支配する家同士の複雑な婚姻関係の意図しない結果にすぎなかった。

第2章 1519年の神聖ローマ皇帝選挙

しかし、意図したにせよしなかったにせよ、このようにして出現したハプスブルク帝国が、他のすべての国々に脅威を与える存在となったという見方はどうであろうか。16世紀前半から17世紀半ばの西ヨーロッパの国際関係について分析した自らの著作の1章を、「ハプスブルク家の覇権獲得の試み、1519年～

1659年」と名付けたポール・ケネディも、ハプスブルク家には、「ナポレオンやヒトラーのようなやり方でヨーロッパを支配しようとする、意識的な計画はなかった」と認めている。にもかかわらず、ケネディは、次のように続ける。「もしハプスブルク家の支配者達が、防衛的な目的をも含めて彼らのすべての限られた地域的な目的を達成した場合、ヨーロッパの支配権は事実上彼らのものとなったであろう。」¹⁰後のフェリペ2世や三十年戦争の時期はさておき、カールの時代のハプスブルク勢力が、他のすべての国々に脅威を与えたという見方は正しいのだろうか。ケネディ自身は、そうであったと考えているようである。ケネディは、ハプスブルク家の所領の地理的分散が集権的な帝国の建設を不可能にしたと指摘しながら、「他の君主や諸国はハプスブルク家の力のこの強力な集積を、そのようには見なかった」と指摘し、例えばヴァロワ朝フランスの君主達にとって、カールの支配地はフランスの領土を取り囲むように見えたと主張する¹¹。

このような見方は、ある程度、歴史家の支持を得てきた。例えば、フランス国王フランソワ1世は、1519年の皇帝マクシミリアン1世の死に際して、神聖ローマ皇帝位をカールと争い敗れるが、フランソワの動機は、多くの歴史家によって、少なくとも部分的には、カールが神聖ローマ皇帝の地位を得るとフランスが「強力なハプスブルクの輪」によって包囲されるという、戦略的な安全保障上の考慮から説明されてきた¹²。しかし、最近では、フランソワの動機が、安全保障上の考慮よりもむしろ自らの威信の増大にあったという見方が強まっている¹³。たしかに、フランソワは、皇帝位を得たカールが、「疑いなく私をイタリアから放り出すであろう」と恐れた¹⁴。しかし、フランソワのイタリアへの関心自体が、そもそも安全保障上の考慮からくるものではなかった。フランソワは、1515年の即位と同時に北イタリアに侵攻して、先王ルイ12世が1500年に一度占領しながら、1512年にローマ教皇やアラゴン王、ヴェネツィア共和国との戦争によって失ったミラノ公国の支配を確保したが、その目的は、フランス王家が継承権を持つ土地の確保とフランス王家の威信の回復、そして、フランスの騎士階級に名誉を回復し、武勇を示す機会を与えることであった¹⁵。さらに、近代初頭のヨーロッパでは、野心的なヨーロッパの君主にとって、古代ローマ帝国の記憶とつながり、ローマ教皇の居住地として超国家的なアイデンティティを付与されたイタリアの支配が、特別な意味を持ったことも指摘し

ておく必要がある¹⁶。フランソワの政策は、後のルイ14世の政策を特徴づけるような、防衛可能な国境線の確保といった戦略的な考慮を全く欠くものであった。

また、もしハプスブルク家への領土と権力の集中が他の諸勢力に脅威を与えたのなら、なぜ神聖ローマ帝国の選帝侯達は、フランソワではなくカールを皇帝に選んだのであろうか。多くの歴史家は、選挙の帰趨に影響を及ぼした最大の要因は賄賂であったと考える。つまり、カールは、当時ヨーロッパ最大の銀行家であったアウグスブルクのフッガー家をはじめ、ドイツやイタリアの銀行家の力を借りて、フランソワとの賄賂合戦に勝利したという説明である。選挙の帰趨には、他にもドイツにおける反仏感情も影響したと言われるが、賄賂の額が決定的な要因であったとすれば、それは、帝国諸侯がハプスブルク家によるドイツ支配に大きな懸念を持たなかったことを示している¹⁷。もっとも、賄賂が選挙の結果を決めたという見方に、すべての歴史家が同意するわけではない。ヘンリー・J. コーンは、たしかに選帝侯達は二人の候補が激しく対立するという状況を利用して経済的利益を得たが、決して賄賂の額でどちらに投票するのかを決めたのではなく、金銭に限られない複雑な利害関係や帝国の安定といった要因から彼らの態度を決定したと主張した。しかし、コーンによる各選帝侯の投票に至るまでの態度の分析においても、ハプスブルク家によるドイツ、あるいはヨーロッパ支配の強い恐怖を見出すことはできない。7人の選帝侯のうち、一貫してフランソワを支持したとされるブランデンブルク辺境伯とトリアー大司教は、彼らに特殊なハプスブルク家との利害対立をもとにそうしたのであって、ハプスブルク家の勢力増大を一般的な脅威として認識したわけではなさそうである¹⁸。事実、フランソワ1世は、選帝侯の支持を得るために、ハプスブルク家の脅威ではなく、むしろ若さと未経験から来るカールの弱さを強調した。彼は、オスマン＝トルコの脅威からキリスト教世界をよりよく守れるのは自分であり、カールはドイツとスペインという遠く離れた領土を支配する必要から、ドイツに十分な関心を払えないであろうと主張した¹⁹。フランソワのこのような主張が、オスマン帝国の脅威を最も強く感じた帝国東部において全く受け入れられず、選帝侯ボヘミア王が一貫してハプスブルク支持の態度をとったことは、少なくとも帝国の一部では、ハプスブルク家が脅威というよりは安全の保護者とみなされたことを示している²⁰。もし帝国外に大きな力の基

盤を持つ皇帝の選出に選帝侯がいくばくかの不安を覚えたとしても、そのような不安は、カールが選帝侯との選挙協約によって彼らの歴史的特権を保証し、さらに拡大したことによって、ある程度鎮められた²¹。

このようにして見てくると、ハプスブルク帝国の出現が一人の支配者によるヨーロッパ支配の不安を呼び起こしたという見方は、少なくとも帝国出現の前後の時期に関して言えば、正しくないように思われる。ヘンリー 8 世の最も権威ある伝記を書いた J. J. スカリスブリックが指摘するように、当時イングランドの外交政策を決定する上で決定的な役割を果たした二人の人物、つまり国王とその大法官トーマス・ウルジーは、スペインの支配と神聖ローマ皇帝位がハプスブルク家のカールの下で統一されたことを、それによってフランスとハプスブルク勢力の力がほぼ等しくなり、その結果、イングランドがどちら側につくかによって力のバランスが大きく左右されることになって、イングランドの外交的地位が上昇すると予測し、恐れるよりもむしろ歓迎した²²。

第 3 章 イタリア戦争、1521－1530年

第 1 節 戦争の原因

一般的な説明によれば、すでにスペインの支配者となっていたカールが1519年にハプスブルク家世襲領と神聖ローマ皇帝位を獲得したことは、ハプスブルク家の脅威を高め、1521年に始まるイタリア半島を主戦場とするハプスブルク家とヴァロワ家の戦争を不可避にしたとされる。しかし、フランソワ 1 世が、ハプスブルク家のヨーロッパ支配の危険に対抗する、ヨーロッパの勢力均衡の守り手であったとする見方は、あまりに大雑把で正確さを欠く²³。これにはいくつかの理由があるが、何よりも、新たなイタリア戦争の直接の原因は、力のバランスや安全保障ではなく、二人の君主の間の威信をめぐる争いにあった。

一般には、1519年の選挙によってカールは神聖ローマ皇帝になったと考えられているが、厳密に言えばこれは正しくない。実際には、「ローマ皇帝に選ばれし者」という称号を得たのであり、正式に皇帝となるには、ローマにおいて教皇による戴冠を受ける必要があった。しかし、これはイタリア半島の軍事的支配が前提となり、中世においても戴冠式挙行のための軍事遠征は多くの戦争

の原因となってきた。例えば、カールの祖父マクシミリアンは、1508年に戴冠のためにローマ遠征を試みたが、ヴェネツィア共和国の軍事的抵抗によって失敗し、結局正式に皇帝としての戴冠を受けられないという屈辱を味わった²⁴。イタリアでの戴冠式の挙行は、皇帝に選出された者がその名にふさわしい実力を持つことの証明であり、カールがローマにおける戴冠式を望んだのはごく自然なことであった。

しかし、カールのローマ遠征計画は、不可避免的に、カールがその途上において元来皇帝の封土であるミラノ公国を奪回しようとするのではないかという不安を、フランソワに抱かせた。フランソワは、カールのイタリア行きを妨害するために、ナヴァールに侵攻し、また、ハプスブルク家と対立するブイヨン公でセダンの領主マルク家のロベールに財政的援助を与えてルクセンブルクを攻撃させた。これに対してカールが反撃する形で、両者の戦争は開始された。R. J. クネヒトが述べたように、

長期にわたって続いたヴァロワ家とハプスブルク家の紛争の伝統的な教科書的説明（すなわち、それが、ハプスブルクによる包囲を打ち破ろうとする、フランスの試みを意味していたという説明）は、フランソワ1世の直接的な目的を理解しない単純すぎる見方である。彼は、単にカールをイタリアから引き離しておきたかったのであり、この時点で本格的な戦争を計画していたわけではない²⁵。

つまり、1520年代の両者のイタリアをめぐる一連の戦争の真の原因は、皇帝としての戴冠式の挙行とミラノ公国の保持という、名誉や威信をめぐる二人の君主の争いであった。

第2節 戦争の経過

こうして始まったカールとフランソワの戦いは、前者の有利に進んだ。ナヴァールやネーデルラントにおいてハプスブルク側は侵略を撃退し、特にネーデルラントでは国境地帯でいくつかの戦略的に重要な町を奪った。イタリア半島では、ミラノの支配下にあったパルマとピアツェンツァを教皇領に編入することを条件に、メディチ家の教皇レオ10世と同盟を結び、ナポリに駐屯してい

たスペイン兵、フェルディナントがドイツから送ったドイツ傭兵ランツクネヒト、教皇の雇ったスイス傭兵からなる軍隊は、1521年11月にはミラノを占領し、フランスによってミラノ公の地位から追われたスフォルツァ家をミラノ公に復帰させた。また、ジェノヴァでは、親仏派政権を追い出し、親皇帝派をドージェの座につけた。

これに対して、フランソワ1世は、1522年以降毎年北イタリアに派兵してミラノ奪回を試みるが失敗し、ついに1524年秋には自ら軍を率いて北イタリアに進軍しミラノを奪い返した。しかし、翌年2月、パヴィア近郊の戦いで帝国軍に対して壊滅的な敗北を喫し、自らも捕虜となった。自らの希望でスペインへと連れてこられたフランソワは、1526年1月に、イタリア半島とネーデルラントにおけるすべての要求を放棄し、カールにブルゴーニュを割譲することを約したマドリッド条約に調印した。カールは、祖母マリー、父フィリップを通じて受け継いだブルゴーニュ公位を保持したが、肝心のブルゴーニュの土地自体は、マリーの父シャルルが1477年に死去した際に、女系の継承が禁止されているフランス国王の封土であるという理由で、ルイ11世によって奪われていたのである。フランソワ1世は、息子二人を人質として差し出すのと引き換えに解放された²⁶。

しかし、フランソワはフランスに帰還したのち、マドリッド条約は強要されたものであるとして、ブルゴーニュの割譲を拒否した。5月には、フランスとイタリア諸国の間で、コニャック同盟の名で知られる同盟が締結される。この同盟には、メディチ家の教皇クレメンス7世、ヴェネツィア、フィレンツェ、フェラーラ公、そして、1521年、1525年と二度にわたってカールがミラノ公位に復帰させたスフォルツァ家のフランチェスコ・マリアまでが参加した²⁷。この同盟は、一見したところ、ハプスブルクの勢力増大によるヨーロッパ支配の危険に対してフランスとイタリア諸国が団結した、西ヨーロッパの全般的均衡を回復するための同盟であるかのように思える。しかし、ガレット・マッティングリーが指摘したように、コニャック同盟を、国益の計算に基づく勢力均衡政策の典型とみなすことは正しくないであろう。それは国益というよりは諸侯による家の利益の追求の結果であり、「イタリア人達による、一人の外国の支配者による支配を、もう一人の支配者を呼び込むことによって逃れようとする、もう一つの試みにすぎなかった」²⁸。フランソワ1世も、コニャック同盟に参

加するにあたって、息子二人の解放のためにカールに圧力をかける以外の目的を持たなかった²⁹。フランソワは、二人の王子の解放を得るまでは、カールとの直接対決を避けることを望み、イタリア半島で帝国軍との戦いの中心となった教皇クレメンス7世の再三の催促にもかかわらず、同盟軍に十分な財政的援助を与えることを怠った。フランスの支援が得られないこともあって、同盟軍は劣勢に立ち、クレメンスは帝国軍との休戦を試みるが、財政的困窮は圧倒的優勢にあった帝国軍も同様であり、略奪によって給料の未払いの埋め合わせを得ることを望んだ帝国軍の兵士は、1527年5月にローマに進軍し、8千から1万とも言われる数の市民を虐殺し、略奪に及んだ。歴史に悪名高い帝国軍のローマ略奪である³⁰。

帝国軍のローマ占領によって教皇までが事実上囚われの身となったことを見たフランソワは、カールへの融和的態度はもはや王子の解放につながらないと考え、イタリア半島への直接的な軍事介入に踏み切る。1527年8月には、ロートレック元帥率いる軍隊がアルプスを越え、ミラノを避けながらもロンバルディアを席卷した後、翌年2月には南下してナポリ王国に侵入した。同時に、フランソワに雇われたジェノヴァの海軍司令官アンドレア・ドリアの甥フィリップ率いる艦隊がナポリを海上から封鎖し、1528年春には、ナポリの陥落はもはや時間の問題と思われた。

しかし、ここで、戦況は再び大きく変わる。まず、フランソワによる自らの扱いと、フランスがジェノヴァの商業上のライバルとなりうる近郊の港サヴォーナをジェノヴァに引き渡さなかったことに不満を持ったアンドレア・ドリアが、7月初頭に自らの艦隊をナポリ沖から撤退させた。同じころ、ナポリを包囲するフランス軍は、疫病の流行で大きな打撃を受け、撤退を開始した。ドリアは、8月にカールと契約を結び、ハプスブルク家の地中海艦隊の総司令官に任命された。9月には、ドリアの艦隊のジェノヴァ沖での示威行動と呼応したジェノヴァ市内の動きにより、1527年にドリア自身の支援によって権力の座に就いたジェノヴァの親仏派政権は打倒された。ドリアの皇帝派への転向は、地中海における海上の力のバランスをその後長きにわたって大きく変える重要な出来事であったが、その効果は、カール自身のイタリア遠征という形で即座に現れた。つまり、イスラム教徒の私掠船がうごめく地中海の航海においてカールの身の安全を保証できるような艦隊をスペインは保有せず、これがカー

ルのイタリア行きの大きな障害となっていたが、ドリアの強力な艦隊は、この問題を解決したのである。

カールは遠征の準備を進めたが、この間、1529年7月のバルセロナ条約によって、教皇クレメンス7世は、コニャック同盟を破棄してカールとの協定に達した。カールは、皇帝軍のローマ略奪後にフィレンツェを追われたメディチ家によるフィレンツェの支配回復、ロマーニャ地方におけるいくつかの町の教皇領への返還を約束し、これに対して教皇は、カステールリャにおける教会財産への課税に関する国王の特権を回復すること、そして、カールの戴冠で報いることを約束した。カールは7月末にスペインを発ち、8月12日にジェノヴァに到着するが、その間8月初旬には、カンブレ条約によってフランソワとの和平に達した。フランソワ1世は低地帯においていくつかの町をカールに譲渡し、フランドルやアルトワへの宗主権要求を取り下げることがを約束したが、これに対して、カールはブルゴーニュへの要求を放棄し、身代金と引き換えにフランソワの王子二人を解放することに同意した。

イタリア半島においては、いまだにヴェネツィアやミラノ公フランチェスコ・マリア・スフォルツァ、1527年にメディチ家を追放したフィレンツェ共和国が抵抗を続けたが、カールは、フランチェスコ・マリアをミラノ公として維持するという条件で1529年末に前二者と和解し、1530年8月にはフィレンツェが降伏し、戦争は終結する。この間、ドイツの問題への対処を急ぐカールは、1530年2月にローマではなく北部の町ボローニャで教皇クレメンス7世によって神聖ローマ皇帝として戴冠された³¹。

第3節 戦争の帰結：イタリア半島におけるハプスブルク家の意図せざる覇権

1518年以降1530年の死まで、カールの所有するすべての領土を管轄する大書記官長の職にあったガッティナラは、西ヨーロッパ全域に広く散らばるハプスブルク家の支配地の要として、イタリア半島、特にミラノの支配が重要であると、若き皇帝に説いた。ミラノは、スペイン、ナポリといったヨーロッパ南部の領土と、オーストリア、ネーデルラントを結ぶ帝国の戦略的中心として最適であり、ミラノの支配なしには、スペインとネーデルラントの連絡は、フランスの攻撃にさらされる危険のある英仏海峡を通過しての海上ルートしかなくなる。もっとも、ピエモンテ出身でありイタリアへの自らの愛を隠さなかった

ガッティナーラは、北イタリアにおける領土拡大による直接支配を主張したのではない。彼は、各都市の有力者に支持された各地の諸侯との同盟関係を通じて、ハプスブルク家のゆるやかな覇権を確立することを勧めたのである。彼が最も重視したミラノの支配に関しても、ガッティナーラは、直接的な軍事支配を主張する軍指揮官達に反対し、小規模な軍隊を維持しながらフランチェスコ・マリア・スフォルツァを公位に就けて間接的な支配を図るべきだと主張した³²。

中世以来君主の宰相の役割を果たしてきた書記官長の権力の低下と、近代的な国務大臣の祖となる狭い領域での実務家である新しいタイプの書記官達の重要性の増大という、当時ヨーロッパの多くの国々で見られた趨勢の中で、ガッティナーラ自身自らのカールへの影響力の低下に大きな不満を持ったが³³、カールが、イタリア問題の専門家としてのガッティナーラの見解に一目置いたことに疑いはなく、実際に、1520年代のイタリア戦争の帰結は、彼の計画にきわめて近いものになった。すでにカールの祖父フェルナンドの時代にアラゴン家が支配したナポリ、シチリア島、サルデーニャ島を除けば、カールのイタリアにおける覇権は、各地の有力者との同盟を通じた間接支配によるものであった。その際、当時一般的であった婚姻関係による同盟関係の強化が図られたことは言うまでもない。ハプスブルク家とメディチ家やパルマを支配したファルネーゼ家が婚姻関係で結ばれただけでなく、ナポリやミラノの総督を務めたスペインの名門貴族とイタリア半島の有力者の間でも複雑な婚姻網が張り巡らされ、地元のエリートのハプスブルク支配への巧妙な取り込みが実現した。ハプスブルクの支配が、地元のエリートを政治的、経済的な利益分配の体系に取り込むゆるやかな覇権という形を取ったことは、ミラノやジェノヴァをフランスの一部であるかのように直接支配しようとしたフランソワ1世のやり方とは対照的なものであり、地元の諸勢力にとって、はるかに受け入れやすいものであった。

こうやって実現したイタリア半島におけるゆるやかな覇権は、その後長きにわたり西ヨーロッパにおけるハプスブルクの力の一つの大きな基盤となった。カールの地中海におけるあらゆる作戦がドリアの艦隊の参加なしには不可能であったように、グリマルディ家やスピノーラ家、ジェンティーレ家といったジェノヴァの銀行家は、フッガー家やヴェルザー家に代表されるアウグスブ

ルクの銀行家と並んで重要な、彼の戦争を財政的に支える資金の貸し手となった³⁴。また、ガッティナーラが予測したように、カールの子フェリペの代には、スペインがネーデルラントでの戦争を戦う上で、1535年のフランチェスコ・マリア・スフォルツァの死をもってハプスブルク家の直轄領となったミラノの支配が、ミラノからサヴォイ、フランシュ＝コンテ、ロレーヌを抜けてルクセンブルクに至る有名な「スペインの道」を通じて軍隊を現地に送ることを可能にし、スペインの戦争努力を助けたことは良く知られている³⁵。

しかしながら、ガッティナーラの助言にもかかわらず、カールがどこまで意図的、計画的にイタリア半島での覇権の確立を狙ったのかには、疑問がある。多くの歴史家が主張するように、カールはイタリア半島における戦争を、基本的に防衛戦争とみなした。事実、ウィム・ブロックマンスが指摘するように、1521年の戦争はフランス側の侵略で始まり、1525年のパヴィアの戦いの後、コニャック同盟の形成によってイタリアでの戦争の再開を不可避にしたのも、フランソワ1世であった。さらに、1530年代半ばから1550年代までの、カール存命中のあと三度のフランスとの戦争も、すべてフランス側の侵略によって開始されたものである。カールが、1527年にフランソワ1世がマドリッド条約を破棄してロンバルディアに派兵した際に、そして、1536年に再びフランソワがカンブレー条約を破ってサヴォイアとピエモンテに侵攻した際に、フランソワに対して一対一の決闘を申し込んだことは、彼がいまだ半ば中世的な騎士道の世界に生きており、フランス国王の条約破棄によって傷つけられた自らの名誉を守る必要性を強く感じていたことを、よく示している³⁶。イタリア半島における覇権の確立は、カールにとって、自らの権利と名誉を守る戦いの、予期できたとしても意図せざる結果であった。

第4章 存在しなかったハプスブルク家の脅威：イングランドの外交政策

しかし、それが意図せざるものであったとしても、イタリア半島におけるハプスブルク家の覇権の確立は、すでに高かったヨーロッパの全般的な力の均衡におけるハプスブルク勢力の比重をさらに高めた。1520年のハプスブルク勢力がたとえ他の諸国に大きな脅威を与えなかったとしても、はたして同じことが

10年後にも言えるのだろうか。この問題について考える上で、ハプスブルク家、ヴァロア朝フランスとは大きな力の差があるものの、当時の西ヨーロッパでこれら二つの勢力に次ぐ力を持った、イングランドの政策は示唆に富む。

1510年代から20年代にかけてのヘンリー 8 世の治世の前半には、国王自身と大法官ウルジーがイングランドの外交政策の決定において主導的な役割を果たしたが、この二人の外交目標にはある程度の相違があった。ヘンリーの最大の目的は、大陸の他の多くの君主と同じく王家の権利や名誉の追求であり、フランス王位の奪回や大陸において過去にイングランド国王が支配した土地の回復を追求した。これに対して、ヘンリー以上に同時代の人文主義の影響を受けたと思われる聖職者ウルジーは、人文主義者による当時の非道徳的な外交やキリスト教徒間の戦いへの批判に共感し、大陸においてヴァロア朝フランスとそれに敵対する勢力の力がほぼ均衡する状況を利用して、ヨーロッパにおける諸国家間の闘争の裁定者、平和の保証者という名誉ある地位を自国のために確保しようと望んだ。ヘンリーは、即位直後の1510年代前半には、大陸での野心を追求してフランスへ派兵したが、1510年代半ばに戦費増大による財政的圧迫や、同盟者であるアラゴン王フェルナンドや皇帝マクシミリアンの利己的な行動によって、大陸での野心がそう簡単には実現できないことを悟ると、ウルジーに平和の保証者としての役割を追求することを許した。

しかし、大陸の国際政治情勢の動きにより、イングランドが大陸において効果的な軍事作戦を遂行できそうな有利な状況が生じると、ヘンリー主導の拡張政策が前面に押し出され、ウルジーもこれに大きな不満を示さず従った。例えば、イングランドは、1521年夏にカールとフランソワの調停を試み、調停が行き詰ると11月にカールと翌年対仏参戦することを約した同盟を結んだ。しかし、その後もウルジーは、カールとフランソワの間の調停を追求し、大陸における軍事作戦も小規模なものに止めた。ところが、1523年にフランスの有力貴族で有能な軍事指揮官であったブルボン公シャルルが、ブルボン家の相続人である妻の死を機に国王に所領を奪われたことに反発して反乱を企てると、これにフランス分割の大きなチャンスを見出したヘンリー及びウルジーは、ブルボン公及びカールと密約を結んで、1万の兵を大陸に送り、ウルジーの進言に従ってこれをパリへと進撃させた。この大胆な作戦は、ブルボン公がフランスから逃亡し、帝国軍のフランス侵略も実現しなかったことで失敗に終わったが、1525

年にパドヴァの戦いでフランソワが捕虜となり、大陸侵攻の絶好の機会が訪れると、ヘンリーはカールと自らの間でフランスを分割することを提案した。

このように、ヘンリーとウルジーの妥協の産物であったイングランドの政策は、大陸において決定的な力の不均衡が生じない限り調停の努力と様子見を続けながら、フランスが危機的な状況に陥る機会を待って、大陸での拡張を狙うというものであった。つまり、1520年代半ばまでのイングランドの政策は、基本的に勝ち馬に乗ることにあった。大陸における拡張政策を主導したのはヘンリーであったが、大きな財政負担なしにこれを実現できる機会が現れた際には、ウルジーもこれに強く反対することはなかった³⁷。ハプスブルク勢力のイタリアにおける勝利がヨーロッパ全体に脅威を与えると認識したのなら、彼らがこのような政策をとることはなかったはずである。

イングランドは、フランス分割案が、フランス侵略のための新たな課税への国内における反対と、カールの冷たい反応によって頓挫すると、フランスとの提携によってカールに圧力をかけてイングランドの調停を受け入れさせるという、ウルジー主導の路線へと回帰した。さらに、1527年春の帝国軍によるローマ略奪の後、イングランドはフランスと一段と接近し、1527年8月には、遂にフランスと対ハプスブルク同盟を締結して、翌年1月にはフランスと共にカールに対して宣戦を布告した。しかし、この背景にあったのは、カールによるヨーロッパ支配の恐れではなく、帝国軍によるローマ占領後、カールが教皇クレメンス7世に対して圧倒的な優位に立ち、その結果、教皇が、ヘンリー8世とその妻でカールの叔母であるアラゴン家のキャサリン（カタリーナ）の離婚を認めないのではという不安であった。よく知られているように、二人の間に生まれた男子はいずれも死産か早世し、ヘンリーは男子後継者を得るために、キャサリンと離婚すること、より厳密に言えば、兄アーサーの妻であったキャサリンとの結婚は教会法に反し、そもそも無効であるという確認を、ローマ教皇から得ることを望んだ。ヘンリーは、フランスとの同盟によってカールに圧力をかけ、離婚問題における有利な解決を得ようと試みたのである³⁸。

つまり、ヘンリーとウルジーの政策の重点は、初期には、カールとフランソワの間の調停によりヨーロッパの平和の保証者となることと、ハプスブルクとの同盟による大陸での拡張政策の間で揺れ動き、後に、安定的な王位の継承を実現するためのフランスとの協力へと変化した。王朝の利益や栄光を追求し

たという点で、彼らの狙いに根本的な変化はなかった。ヘンリーは、ハプスブルク家によるヨーロッパ支配の危険を感じるどころか、初期においては、むしろ大陸での拡張という夢を実現するために、カールのフランソワに対する圧倒的勝利を願った。彼は後にフランスとの同盟政策をとるが、これも西ヨーロッパの全般的均衡とは無関係な王朝の利益を追求した結果であった。ヘンリーは、イタリア戦争がカールの完勝に終わった後の1530年代前半にもフランソワとの協力を続けたが、これも、アン・ブーリンとの結婚へのフランソワの支持を得ることを望んだからである。国際政治的な観点から言えば、アンとの結婚を強行するという彼の政策は、カールとの決別を決定的にし、フランスへの外交的依存を強めるという点で、イングランドにとっては非常に不利なものであった³⁹。

第5章 より多角的な分析

本稿では、イタリア半島での戦争を中心とするヨーロッパ大陸西部での展開を中心に、1510年代末から1520年代にかけてのヨーロッパ国際関係を概観してきた。ここでは、ハプスブルク家がヴァロア朝フランスとの対決を有利に進め、特にイタリア半島ではゆるやかな覇権の確立に成功した。しかし、イタリア半島を中心とするフランソワ1世との争いは、カールにとって、広範囲に散在するハプスブルク家の所領を防衛し、神聖ローマ皇帝としての義務を果たすための数多くの戦いの一つに過ぎず、そこでの勝利は、ある程度は、他の地域における彼の権利や義務を犠牲にした上で得られたものであった。事実、イタリア半島での戦いに資源と関心を奪われたカールは、1520年代を通じて、バルカン半島におけるオスマン帝国軍との戦い、地中海における北アフリカを拠点とするイスラム船団の攻撃、ドイツにおけるプロテスタント教の広まりという、まさにキリスト教世界の防衛と宗教的統一性の維持という皇帝の義務にかかわる問題において、守勢に立たされた。

バルカン半島においては、1526年にオスマン帝国軍がハンガリーに侵入し、モハーチの戦いでハンガリー軍に壊滅的な打撃を与え、カールの弟フェルディナントの義弟であるハンガリー国王ラヨシュ2世も戦死した。ボヘミア王で

もあったラヨシュの死により、フェルディナントは、ボヘミア国王に選出され、ハンガリー王位の継承権も主張したが、ハンガリーでは貴族の多数に支持されたトランシルヴァニア侯サボヤイ・ヤーノシュがヤーノシュ1世を名乗って対抗した。フェルディナントは、1527年にクロアチア、スロヴェニアとハンガリー西部を占領したが、トランシルヴァニアを支配するヤーノシュは、ハンガリーの大部分を支配したオスマン帝国の保護を得てこれに対抗した。さらに、1529年秋には、スレイマン1世率いる10万の大軍が、ウィーンを一カ月近く包囲した⁴⁰。

地中海では、1516年に、すでに船舶の掠奪や沿岸の町の襲撃によってキリスト教諸国に被害を与えていた、ヨーロッパではバルバロッサの名で知られた船乗り率いられたイスラム教徒の私掠船団がアルジェを占領した。バルバロッサは、アルジェをスレイマン1世に差し出し、その州知事に任命されると同時に、数千のオスマン軍兵士の提供を受けた。バルバロッサは1518年に戦死したが、ヨーロッパでは同じ名で呼ばれた彼の弟が、スレイマン1世からアルジェの知事の地位とハイレディン（信仰の擁護者）という名を与えられ、彼の後を継いだ。カールは1519年と1523年にハイレディン・バルバロッサの船団やアルジェの本拠地を攻撃するために艦隊を派遣したが、いずれも嵐による難破によって失敗に終わり、ハイレディンの船団は、スペインやイタリアの沿岸部で略奪を繰り返した。1529年には、カステイーリャ艦隊が、バレアレス諸島最南端のフォルメンテラ島沖でハイレディンの部下によってほぼ全隻捕獲され、事態はさらに悪化した⁴¹。

さらに、ドイツでは、長年の苦悩と研究の結果として、人間は行為ではなく信仰によってのみ義とされるという教理に達したヴィッテンベルク大学の神学教授マルティン・ルターが、1517年に、彼にとってはまさに行為による義認の考えに依拠すると思われた、カトリック教会による贖宥状の販売に異議を唱えた。ルターは、その後自らの教説の撤回を求める教皇及び皇帝に対して非妥協的な態度を貫き、聖職者の特権への不満が鬱積していたドイツで、短期間に爆発的に自らの教えを広めることに成功した。ルターは1521年4月のカールによる帝国追放の勅令にもかかわらず、自らの君主であるザクセン選帝侯フリードリヒ3世の保護を得て活動を続け、1520年代半ばまでには、いくつかの自由都市、さらには、ザクセン選帝侯、ヘッセン方伯フィリップ1世、ブランデンブ

ルク＝アンスバッハ辺境伯ゲオルク、彼の弟で1525年にプロイセンのドイツ騎士団領を解散して初代プロイセン公となったアルブレヒト1世など、有力諸侯までがルター派に改宗した。カールは、神聖ローマ皇帝選出直後の1520年から1521年の間を除いて、ドイツから不在であったが、皇帝のリーダーシップが存在しない中、ルター派の弾圧が暴力的な反発を生むことを恐れた帝国議会は、将来の宗教会議においてドイツの宗教問題に包括的な解決が得られるまで問題を先延ばしするという態度をとったため、ルター派への対処は諸侯や都市に委ねられ、ドイツにおける宗教的分裂は着実に深刻化していった。1526年のシュパイアーの帝国議会では、実質的に、帝国諸侯が、将来における宗教会議の開催まで、領邦内の宗教問題を決定する暫定的権限を得た。1529年の二度目のシュパイアーの帝国議会では、皇帝の摂政フェルディナントが諸邦が宗教決定権を持つことを否定し、多数はこれを支持したが、ザクセン選帝侯、ヘッセン方伯を始めとする諸侯や多くの帝国都市代表がこれに抗議した⁴²。

このように、1520年代を通じて、イタリア半島やネーデルラント、ピレネー山脈沿いでのフランスとの戦いに財政的、軍事的資源を集中させる必要が生じたことによって、カールは、それ以外の地域で、効果的にハプスブルク家の所領を防衛し、神聖ローマ皇帝としての義務を遂行することができなかった。たしかに、バルカン半島でのオスマン帝国の拡張に対する防衛的な対応は、ウィーンが明らかにオスマン帝国軍の兵站能力の限界を超える場所に位置し、そのウィーンへの脅威は実際には見た目ほど大きくなかったことを考慮すれば、賢明であったかもしれない⁴³。また、地中海におけるオスマン帝国海軍の脅威についても、当時の戦艦の主流であったガレー船は航続距離が短かった上に、オスマン海軍はアルジェなど北アフリカの支配地を補給の拠点や冬季の停泊基地として本格的に利用することはしなかったため、地中海の制海権をハイレディン・バルバロッサの艦隊に完全に奪われる危険は実際にはなかった⁴⁴。このことは、逆に言えば、当時の技術では、ハプスブルク側がオスマン艦隊を叩く能力も限られていたということでもあり、地中海での戦争に大きな資源を投入することに大きな意味はなかったのかもしれない。しかしながら、こういった見方は、かなりの程度後知恵にすぎない。当時のヨーロッパの人々は、イスラム勢力の脅威を強く感じ、特にキリスト教世界の防衛という皇帝の義務を真摯に捉えたカールにとって、それは放置できるものではなかった。実際に、イ

タリアでの戦争が一段落した1530年代前半には、カールはバルカン半島及び地中海におけるイスラム勢力との戦いにより大きな力を注ぐようになり、それはドイツにおけるプロテスタント教の広まりという、皇帝権の基盤そのものを揺るがす、より本質的な脅威へのカールの対応を鈍らせた。

こういった意味で、ハプスブルク勢力には「すべきことがあまりにも多くあり、戦うべきあまりにも多くの敵があり、防衛すべきあまりにも多くの前線があった」というポール・ケネディの見方は間違っていない⁴⁵。しかし、まさにこの敵の多さを理由として、少なくともカールの時代には、ハプスブルク家による西ヨーロッパの一極支配の危険は存在しなかった。たしかに、軍事的には、スペイン歩兵を中核とするカールの軍隊は、当時の西ヨーロッパで最強であった。フランス軍は重騎兵において帝国軍に優越し、砲兵隊でも互角以上であったが、農民に武器を与えることを嫌うという歴史的社会的理由から、十分な歩兵を持たなかった。このため、フランソワ1世はスイス傭兵を雇ったが、15世紀末にはヨーロッパ最強との名声を誇った彼らは、長槍歩兵の密集方陣という伝統的な戦闘様式にこだわり、戦術的な柔軟性を失った。これに対して、スペイン歩兵は、16世紀初頭に、当時の西ヨーロッパで最高の軍事指揮官として名を馳せたゴンサロ・デ・コルドバが、ナポリにおけるフランス重装騎兵とスイス歩兵との戦いにおいて編み出した、長槍歩兵と火縄銃兵を組み合わせるという新しい戦法に習熟していた。この戦法は、1522年のミラノ郊外のビッコカの戦いでのスイス歩兵に対する、そして、1525年のパヴィアの戦いにおけるフランス騎兵に対する帝国軍の圧勝を生んだ⁴⁶。そして、こういった一連の軍事的成功の結果として得られたイタリア半島における覇権が、両者の軍事的な力にさらに大きな差をつけたことは言うまでもない。特に、アンドレア・ドリアの協力によって、カールがキリスト教世界最強の海軍を持つようになったことは大きい。しかし、カールは、同時に複数の戦線でスペイン歩兵部隊を展開することはできなかったし、1520年代でのイタリア半島における戦争で時に見られたように、敵が真正面から野戦を挑んだ場合には、スペイン歩兵はその威力を余すところなく発揮できたが、後の1536年の帝国軍のプロヴァンス侵攻が示すように、相手が堅固な要塞に籠った際には、為すすべがなかった⁴⁷。また、ドリアの艦隊にも、ハイレディン・バルバロッサのオスマン艦隊という強力なライバルが存在した。実際に、ミラノの奪回を心に誓うフランソワは、1530年

代に入るとオスマン帝国との提携を図り、特に1542年から1544年にかけての
カールとの戦争ではハイレディンのオスマン海軍と提携し、1543年には、南イ
タリアを攻撃したオスマン海軍がツーロンで冬を過ごすという、キリスト教世
界に大きな衝撃を与える事態が発生する⁴⁸。当時力の絶頂にあったオスマン帝
国は、16世紀半ばのヨーロッパの力の均衡の重要な一要素となっており、オス
マン帝国を含めたヨーロッパの地図の中では、黒く塗られたハプスブルク家の
支配地が見る者に与える印象は、ハプスブルク支配下の西部ハンガリー以西の
ヨーロッパのみを示した地図の中でより、はるかに弱くなる。

このように、カールは、1520年代には、西ヨーロッパにおけるヴァロア朝フ
ランス、バルカン半島におけるオスマン帝国軍、地中海におけるハイレディン
のオスマン帝国海軍という少なくとも三つの主要な敵と同時に戦うことを強い
られ、これには後にドイツのプロテスタント諸侯も加わることになった。そし
て、多くの歴史家が指摘してきたように、カールの帝国は、複数の戦線で同時
に戦争を効率的に戦うことを可能にするような、集権的な財政構造を持たな
かった。王権が強く、議会の承認を求めずに比較的安定した税収を恒常的に確
保できたカステールリャを除けば、他の多くの地域では、新たな課税にはその
都度身分制議会の同意が必要であり、この同意は伝統的な都市住民や貴族の特
権を確認したり、彼らに新たな譲歩を行うことによってのみ、得ることができ
た。当座の必要を満たすための譲歩は、王権をさらに弱めるという逆効果を持
ち、さらに、こうして得られた収入も、その地域の防衛のためにも不十分なこ
と、また、その地域の防衛に用途が限定されていることが多く、このことは
カールの行動の自由を制約した。事実、ハプスブルク家の支配地の拡大がもた
らした最大の恐怖とは、それがハプスブルク家によるヨーロッパ支配につなが
るのではないかという他の諸国に与えた恐怖ではなく、むしろ、自分達に関係
ない地域での戦争への財政負担を強いられるのではないかという各地の領民に
与えた恐怖であった。このような恐怖は、カステールリャにおける1520年から
翌年にかけてのコムネロスの反乱の一因となった。このような地方の抵抗によ
る財政上の不足を補うために、カールは最も安定していたカステールリャから
の将来の税収を担保にするなどの手段で、アウグスブルクやジェノヴァの銀行
家からのローンに頼ることを余儀なくされた⁴⁹。

しかしながら、ハプスブルク帝国の非効率な財政を、集権化の失敗の帰結と

みなすことは、おそらく適切ではない。たしかに、カールの治世の初期においては、スペインにおいて地域主義的感情を無視した政策が取られ、神聖ローマ帝国において皇帝の権限を拡大する試みがなされた。しかし、このような非現実的な試みは、抵抗に直面するとすぐに撤回されたし⁵⁰、そもそもカール自身の考えに合致したのかも明らかではない。J. H. エリオットは、コムネロスの反乱終結後のスペインの政治的安定を、「カール5世の帝国主義の基本的に静的な性格」に帰した。

帝国は、ハプスブルク家によって異なる時期に獲得され、国ごとに大きく異なる条件の下でハプスブルク家によって統治された、数多くの世襲の領土—ハプスブルク系、ブルゴーニュ系、スペイン系—から構成されていた。彼が所有した数多くの広範囲に及ぶ領土に関するカールの概念は、それらが世襲財産だという認識にあった。彼は、それぞれの領土を、その土地独自の伝統的な方法でその土地独自の伝統的な法によって統治される、それがいまや単一の君主によって支配される多くの領土のたった一つにすぎないという事実に影響されない、独立した存在と考えがちであった⁵¹。

つまり、カールは集権化に真剣に取り組んだことはなく、カールが集権化に失敗したという見方は、カールの中世的な秩序観を十分に理解しないものである。

おわりに

本稿を締めくくるにあたって、われわれの最初の疑問に立ち返ろう。現代の国際関係論においては、16世紀前半から17世紀半ばにかけての、ハプスブルク帝国優越期の西ヨーロッパ国際関係に関して、以下のような二つの見方がある。第一に、この時期の国際関係は、皇帝権による西ヨーロッパの宗教的統一を維持せんとする試みとそれへの反対が最大のテーマとなった、前近代的な性格の強いものであり、そこからわれわれが学ぶことはないという見方である。第二には、いわゆるハプスブルク帝国を、近代から現代の国際関係史に繰り返し出現してきた、他の諸国に明らかに優越した力を持ち、覇権を追求した勢力の初

期の例とみなし、この時代の国際関係の歴史から学ぶべきことは多いと考える見方がある。本稿における分析は、はたしてこのどちらを支持するのであろうか。

まず、ハプスブルク帝国を初期の覇権国、あるいは覇権をほぼ手にした国とみなす見方から検討しよう。カールが目指した帝国のモデルとしてしばしば研究者が挙げる「普遍君主制 (monarchia universalis)」という言葉は、英語文献においては universal monarchy あるいは world monarchy といった訳語を与えられ、その本来の意味が十分に理解されることなく、カールがヨーロッパの普遍的支配を狙っていたかのような誤ったイメージを流布してきた。この言葉は、ガッティナーラの秘書を務めたエラスムス派の人文主義者アロンソ・デ・バルデスによる造語だと言われているが、その概念自体は中世のキリスト教世界統一の理想に起源を持ち、ガッティナーラが皇帝カール5世の権威を正当化するための原理として使用したものであった。ガッティナーラは、1519年のカールの神聖ローマ皇帝選出直後に、若き皇帝に次のように説いた。

神があなたをキリスト教世界におけるすべての王と君主達の上に立たせ、これまでにあなたの先任者であるシャルルマーニュによってのみ保持された力の高みへとあなたを引き上げるといふ、計り知れない恩寵を施したのであるから、あなたは普遍君主制への道を歩んでいるのであり、キリスト教世界を単一のくびきの下に統一するであります。

この「キリスト教世界を単一のくびきの下に統一する」といった表現に明らかにように、原理的には、普遍君主制の概念は、普遍君主たる皇帝に絶大な権力を与えた。つまり、皇帝はキリスト教世界全体に普遍的な法管的管轄権を持ち、すべての他の支配者は彼の法に従うべきであり、皇帝はキリスト教君主間の争いの調停者としての権威を持つとされた。しかし、ここでも、少なくとも半独立的なヨーロッパ各地の支配者の存在が仮定されていることは注目に値する。さらに、普遍君主制の理念は、ヨーロッパの平和を乱して、キリスト教世界がオスマン＝トルコの脅威に団結して立ち向かうことを不可能にした、フランソワ1世の評判を貶めるためのプロパガンダとして、その最も高邁な形で打ち出されたものの⁵³、ガッティナーラ自身、明らかにそれを実現可能な政治プログ

ラムだとは考えなかった。彼の思い描いた普遍君主制のモデルとは、皇帝のゆるやかな覇権のもとで、各地に独特の制度や法の存在を認めるものであり、皇帝がキリスト教世界のすべてを直接支配するのではなく、その権威を認める他の王国や共和国との友好的な関係によって実現されるべきものであった⁵⁴。

そして、多くの歴史家は、カールが、このガッティナーラ版の普遍君主制の概念すら、はたして真剣に受け取ったのか、疑問を呈する。ウィリアム・モルトビーによれば、

彼の役割に関する皇帝自身の理解は、より単純でより伝統的なものであった。皇帝位の宗教的側面をよく認識し、ブルゴーニュの騎士道の原則を吹き込まれて育ったカールは、彼の皇帝としての第一の義務は、キリスト教徒間の平和を促進すること、そして、信仰を前進させることだと信じた。後の点に関する彼の概念は、中世の十字軍の伝統に深く根ざしていた⁵⁵。

カールの宗教問題における態度については機会を改めて詳しく検討するが、分かりやすく言えば、カールは、ヨーロッパの他の諸君主が、キリスト教世界の保護者としての自らの権威を認め、自らのリーダーシップの下で、キリスト教世界内部の宗教的和解の努力と異教徒との戦いに協力することを理想とした。カールは、フランスとの戦争をこのような理想の実現への障害とみなし、後の1530年代から40年代にかけて、ハプスブルク家とヴァロア家の婚姻関係によって両家の対立を終わらせ、ヨーロッパ内の宗教的和解の努力とオスマン帝国との戦いにおいて、フランソワ1世の協力を得ようと試みた⁵⁶。

ハプスブルク家が覇権を迫及したという一般の印象は、カールのヨーロッパにおける戦争が、ハプスブルク家によるヨーロッパ支配という意味での普遍君主制の概念の実現を目的とするものであったという、大きな誤解に基づいている。カールはそのような意味での普遍君主制の確立を意図したことはなく、キリスト教世界の保護者としての権威の確立という、同じく非現実的だが、内容においてはかなり異なる目的を迫及した。実際には、彼のヨーロッパにおける戦争は、ハプスブルク家によるヨーロッパの支配や覇権の確立ではなく、彼が皇帝の義務と同様に重視したハプスブルク家の家長としての義務を遂行し、王朝の権利と名誉を守るためのものであった。そして、繰り返し見てきたように、

このような目的のために彼が戦った戦争は、他の諸勢力に、ハプスブルク家による西ヨーロッパ全体の支配や覇権の脅威を与えなかった。カールの時代の西ヨーロッパの国際関係を、ハプスブルク家による覇権の追求という観点から分析することは、全く正しくない。

それでは、この時期の西ヨーロッパの国際関係を、中世的で現代とのつながりの薄いものとする見方については、どうであろうか。国際関係論の研究者が、16世紀前半から17世紀半ばまでの西ヨーロッパ国際関係を、前近代的なものとして軽視する最大の理由は、それが国家理性ではなく宗教的熱情に支配されていたという彼らの信念にある。例えば、ゴードン・A. クレイグとアレクサンダー・L. ジョージは、非常によく知られた国際関係論のテキストの中で、以下のように書いている。

[帝国を中心とする秩序から数多くの大国からなるシステムへの] 変容のプロセスは…三十年戦争とともに始まった。それは時に最後の宗教戦争と呼ばれるが、この表現は、この戦争が元々ハプスブルク家とそのイエズス会の助言者達の、帝国のプロテスタント教を信仰する地域において真の信仰を復活させようという願望に動機づけられていたという事実によって、そして、30年間の戦いの間に、宗教的動機が重要性を失うにつれて政治的考慮が重要性を増し、ドイツというヨーロッパの中心からヨーロッパ全域に紛争が拡大するにつれて、いくつかの政府—特にフランス—が、世俗的理由のために同じ宗派を信じる人々に対して戦争を戦うようになったことによって、正当化できる⁵⁷。

つまり、クレイグとジョージは、三十年戦争以前のヨーロッパの国際関係では、宗教的動機が政治的考慮よりはるかに重要であり、宗教が戦争においてどちらの側につくかを決定したと信じている。このような見方は、多くの国際関係論の研究者に共通するものであり、キッシンジャーがリシュリューの政策について書いた以下の一文は、典型的な例である。

いまだ宗教的熱情とイデオロギー的狂信によって支配された時代において、道徳的責務から解放された冷静な外交政策は、砂漠の中の雪に覆われた高

峰のように、異彩を放った⁵⁸。

たしかに、上に検討した神聖ローマ皇帝カール5世の政策を見る限り、このような見方はある程度正しいように思われる。カールの最大の目的は、キリスト教世界の宗教的一体性の維持と異教徒からの防衛にあった。しかし、本稿でのこれまでの分析を振り返り、1520年代の西ヨーロッパ国際関係の最大の特徴は何であったのか考えてみれば、それは各地の支配者による家の権利と名誉の追求であり、そこに宗教的動機を見出すことは難しい。カールの願いは、カール自身も重視した、家の権利と名誉をかけた争いの中に埋没してしまったかのようである。集権的な国家そのものが存在しなかった当時の西ヨーロッパにおいて、近代的な国益の観念が存在しなかったことは事実であったとしても、当時の支配者達は、家の権利や栄光の追求という形で、ある種の利益の追求をはかり、このことは、国際関係における宗教の重要性を相対的に弱めることになったと言えるかもしれない。

しかし、現段階で、この問題について結論を下すのは時期尚早であろう。16世紀半ばの西ヨーロッパにおける国際関係と宗教のかかわりについて何らかの結論を得るには、オスマン＝トルコ帝国がヨーロッパの力の均衡の一要因として存在感をさらに強め、西ヨーロッパにおける宗教対立が本格化する、1530年代以降の時期について詳しく検討することが不可欠であり、この検討には新たな機会を要する。

Notes

- 1 拙稿「ヨーロッパ国際関係の幕開け? —1494年のフランスのイタリア侵攻—」 *Mukogawa Literary Review*, No. 47 (2011), 35-73頁。
- 2 K. J. Holsti, *International Politics: A Framework for Analysis* (7th ed., Englewood Cliffs, N. J., 1995), ch. 2.
- 3 ジョセフ・S. ナイ・ジュニア、田中明彦、村田晃嗣訳『国際紛争：理論と歴史 [原書第5版]』有斐閣、2005年、3-4頁。
- 4 Henry Kissinger, *Diplomacy* (New York, 1994), pp. 56-9.

- 5 アーノルド・トインビー『歴史の研究』第18巻、経済往来社、1971年、404-45頁。引用は、431、433頁。
- 6 Research Working Group on Cyclical Rhythms and Secular Trends, 'Cyclical Rhythms and Secular Trends of the Capitalist World-Economy: Some Premises, Hypotheses, and Questions', *Review*, II, 4 (1979), pp. 483-500, especially p. 499.
- 7 Paul Kennedy, *The Rise and Fall of the Great Powers: Economic Change and Military Conflict from 1500 to 2000* (New York, 1989).
- 8 J. H. Elliott, *Imperial Spain, 1469-1716* (London, 1963), pp. 134-5, 137-44; Wim Blockmans, *Emperor Charles V, 1500-1558* (London, 2002), pp. 13-14.
- 9 M. J. Rodríguez-Salgado, *The Changing Face of Empire: Charles V, Philip II and Habsburg Authority, 1551-1559* (Cambridge, 1998), pp. 34-5.
- 10 Kennedy, *Rise and Fall*, p. 35.
- 11 Ibid., p. 33.
- 12 M. S. Anderson, *The Origins of the Modern European State System, 1494-1618* (London, 1998), p. 91; David Potter, *A History of France, 1460-1560: The Emergence of a Nation State* (Basingstoke and London, 1995), p. 265.
- 13 William Maltby, *The Reign of Charles V* (Basingstoke and New York, 2002), pp. 33-4; Blockmans, *Emperor Charles V*, p. 40.
- 14 R. J. Knecht, *Renaissance Warrior and Patron: The Reign of Francis I* (Cambridge, 1994), p. 165.
- 15 Ibid., pp. 62-3, 65.
- 16 Rodríguez-Salgado, *The Changing Face of Empire*, pp. 31-2.
- 17 Maltby, *The Reign of Charles V*, pp. 19-20; Knecht, *The Reign of Francis I*, pp. 165-8, 170.
- 18 Henry J. Cohn, 'Did Bribes Induce the German Electors to Choose Charles V as Emperor in 1519?', *German History*, Vol. 19, No. 1 (2001), pp. 1-27.
- 19 Knecht, *The Reign of Francis I*, p. 168.
- 20 Cohn, 'Bribes', p. 19.
- 21 Ibid., pp. 13-14; ピーター・H. ウィルスン、山本文彦訳『神聖ローマ帝国、1495-1806』岩波書店、1999年、37頁。
- 22 J. J. Scarisbrick, *Henry VIII* (Harmondsworth, 1972), p. 115-16.

- 23 Kennedy, *Rise and Fall*, p. 36; Potter, *A History of France*, pp. 266-7.
- 24 ハンス・K. シュルツェ、五十嵐修、浅野啓子、小倉欣一、佐久間弘展訳『西欧中世史事典Ⅱ—皇帝と帝国—』ミネルヴァ書房、2005年、227-8頁。
- 25 Knecht, *The Reign of Francis I*, pp. 175-6.
- 26 Ibid., pp. 200-27, 239-48; Maltby, pp. 34-6.
- 27 Knecht, *The Reign of Francis I*, pp. 249-56.
- 28 Garrett Mattingly, *Renaissance Diplomacy* (Reprint, New York, 1988), p. 150.
- 29 Knecht, *The Reign of Francis I*, p. 255.
- 30 Ibid., pp. 256-60.
- 31 Ibid., pp. 273-4, 278-9, 282, 283-5; Maltby, *The Reign of Charles V*, pp. 37-8; James D. Tracy, *Emperor Charles V, Impresario of War: Campaign, Strategy, International Finance, and Domestic Politics* (Cambridge, 2002), pp. 47-9, 114-23.
- 32 John M. Headley, 'The Hapsburg World Empire and the Revival of Ghibellinism', in Siegfried Wenzel ed., *Medieval and Renaissance Studies: Proceedings of the Southeastern Institute of Medieval and Renaissance Studies, Summer 1975* (Chapel Hill, 1978), pp. 93-127, at pp. 107-10; Maltby, *The Reign of Charles V*, p. 34; Blockmans, *Emperor Charles V*, pp. 59-60.
- 33 John M. Headley, *The Emperor and His Chancellor: A Study of the Imperial Chancellery under Gattinara* (Cambridge, 1983).
- 34 Henry Kamen, *Spain's Road to Empire: The Making of A World Power, 1492-1763* (London, 2002), pp. 65-70; Blockmans, *Emperor Charles V*, pp. 59-60; Tracy, *Emperor Charles V, Impresario of War*, pp. 95-100.
- 35 いわゆる「スペインの道」については、Geoffrey Parker, *The Army of Flanders and the Spanish Road, 1567-1659: The Logistics of Spanish Victory and Defeat in the Low Countries' Wars* (2nd ed., Cambridge, 2004) が詳しい。
- 36 Blockmans, *Emperor Charles V*, pp. 76-7; Maltby, *The Reign of Charles V*, p. 37-8.
- 37 Scarisbrick, *Henry VIII*, pp. 40-189; Joycelyne G. Russell, 'The Search for Universal Peace: the Conferences at Calais and Bruges in 1521', *Bulletin of the Institute of Historical Research*, Vol. 44 (1971), pp. 162-193; Knecht, *The Reign of Francis I*, pp. 177-82, 200-9, 229.
- 38 S. J. Gunn, 'Wolsey's Foreign Policy and the Domestic Crisis of 1527-8', in S. J.

- Gunn and P. G. Lindley, ed., *Cardinal Wolsey: Church, State and Art* (Cambridge, 1991), pp. 149–177, at pp. 150–2; Knecht, *The Reign of Francis I*, pp. 254, 258–9, 272–3, 278.
- 39 G. W. Bernard, *Anne Boleyn: Fatal Attractions* (New Haven and London, 2010), pp. 63–4.
 - 40 Blockmans, *Emperor Charles V*, pp. 17–19; Maltby, *The Reign of Charles V*, p. 43–5.
 - 41 Tracy, *Emperor Charles V, Impresario of War*, pp. 133–5, 137; Jan Glete, *Warfare at Sea, 1500-1650: Maritime Conflicts and the Transformation of Europe* (Abington, 2000), pp. 98–9.
 - 42 Michael Hughes, *Early Modern Germany, 1477-1806* (Philadelphia, 1992), pp. 33–55; Richard Bonney, *The European Dynastic States, 1494-1660* (Oxford, 1991), pp. 15–21, 30–3; Maltby, *The Reign of Charles V*, pp. 48–51.
 - 43 Ibid., p. 44; J. R. Hale, *War and Society in Renaissance Europe, 1450-1620* (Baltimore, 1985), p. 16.
 - 44 Glete, *Warfare at Sea*, p. 102.
 - 45 Kennedy, *Rise and Fall*, p. 48.
 - 46 Maltby, *The Reign of Charles V*, p. 40; Knecht, *The Reign of Francis I*, pp. 182–4, 218–25; Frank Tallett, *War and Society in Early Modern Europe, 1495-1715* (New York, 1992), pp. 23–4.
 - 47 Tracy, *Emperor Charles V, Impresario of War*, pp. 159–61, 163.
 - 48 Knecht, *The Reign of Francis I*, pp. 487, 489.
 - 49 Tracy, *Emperor Charles V, Impresario of War*, especially chs. 3–5; Blockmans, *Emperor Charles V*, pp. 28–30; Maltby, *The Reign of Charles V*, pp. 8–17, 65–75.
 - 50 Blockmans, *Emperor Charles V*, pp. 32–3.
 - 51 Elliott, *Imperial Spain*, p. 166.
 - 52 Henry Kamen, *Spain, 1469-1714: A Society of Conflict* (3rd edition, Harlow, 2005), p. 70.
 - 53 Franz Bosbach, 'The European Debate on Universal Monarchy', in David Armitage, ed., *Theories of Empire, 1450-1800* (Aldershot, 1998), pp. 81–98, at pp. 81–90.
 - 54 Headley, *The Emperor and His Chancellor*, pp. 11–12.

- 55 Maltby, *The Reign of Charles V*, p. 29.
- 56 Blockmans, *Emperor Charles V*, pp. 71–4.
- 57 Gordon A. Craig and Alexander L. George, *Force and Statecraft: Diplomatic Problems of Our Time* (3rd ed., Oxford, 1995), p. 4.
- 58 Kissinger, *Diplomacy*, p. 62.